

平成十七年三月 現代密教 第十八号 抜刷

理趣經十七清淨句の「色」「声」「香」「味」

竹内照公

# 理趣經十七清淨句の「色」「声」「香」「味」<sup>(1)</sup>

竹内照公

はじめに

理趣經の十七清淨句は、「妙適」にはじまり、「味」に終わる。「妙適」は、総体を表し、以下十六が別体とされる。その最後の四清淨句は、「色」「声」「香」「味」である。この四清淨句については、「六塵の境界が本来清淨」であること意味し、「四塵を挙げて、六塵の境界も法性の清淨にあるを覺つた境地」と、那須政隆著『理趣經達意』<sup>(2)</sup>では説明されている。しかし、詳しく「四」である所以には言及していないように思われた。そこで、この四清淨句から読み取れる内容について検討する。

真言宗常用である不空訳のいわゆる『理趣經』では、初段の正説分の第一段「金剛薩埵章」(一切の清淨の大樂三昧という般若の法門)の総説である、「一切法清淨句門」に対する別説として、十七の清淨句が説かれる。この部分は、理趣經の中心をなす部分であるので、その真義を心得るには程遠い初学のものが、不用意に論ずるべき部分ではないといわれている。『理趣經達意』でも、「若し十七清淨句を真に徹底して理解しようとするならば、

まず文字を離れなければならぬ。そしてその十七尊の曼荼羅を通じて、渾然として潜んでいる全体の精神を把握しなくてはならぬ」のであり、「この清浄句門を解するには、まず本不生の境地を覚り、そこに展開される身口意三平等の句門を味得しなくてはならぬ。そのことを忘れて常識的な差別限定の立場で勝手な解釈をなせば、清浄句門は忽ち煩惱句門となってしまうのである」と誠められている。

しかし、その一方で、語句のすべてが、「般若の理趣の表示である以上、それに触れないで、般若の理趣を覚証せんとすることは、固より無理な話である。そればかりでなく、初学の諸子にとっては、まず文々句々の意味を理解することが、第一の手がかりとなるであろう。」とし、一文字もおろそかにしないという態度が求められている。そこで、十七清浄句において、私にとつて「体解的につなずいてゆく」ことを妨げている疑問点の一つについての理解をめざし考察を試みた。

#### 十七清浄句のあらましと疑問点

清浄句は、真言宗常用の不空訳『理趣經』では、「妙適」にはじまり、「味」に終わる十七である。これは、 $1 + 4 \times 4 = 17$  という構造で十七尊の曼荼羅と関係付けられている。

『理趣經達意』によれば、十七清浄句は「主観客観の一切諸法が本来清浄」であることを示しているという。「妙適」という総論と、「欲箭」「触」「愛縛」「一切自在主」および、「見」「適悦」「愛」「慢」の九清浄句は、「人間の内面的欲望のすべてを代表せしめたもの」であり、「欲望が発動する順序に依つたもの」という。「欲箭」以下の「初めの四句は欲望が発動する動因に約し、次の四句は欲望を満足したる結果に約した」として、「欲箭」「莊嚴」「意滋沢」「光明」「身樂」および、「色」「声」「香」「味」は、「終わりの八清浄句を持つて、欲望の対象

なる外界の諸現象を代表せしめたもの」であるという。「莊嚴」以下の四句は、「春夏秋冬の自然界が、本来清淨なることを示したもの」であり、「色」以下の四句は、「六塵の境界が本来清淨」であることを挙げたものとして<sup>(5)</sup>いる。

ここで、瑣末な疑問ではあるが、「色」以下の四句は、なぜ「四」であるのだろうか。「四塵を挙げて、六塵の境界も法性の清淨にあるを覚った境地」を説いているというが、なぜ、「六」でなく、「五」でもなく、「四塵」を挙げているのだろうか。この点について、『理趣經達意』では明確に触れていないように思われた。この点について検討した。

「十七」の清淨句と「色」「声」「香」「味」「および」「触」

十七という清淨句の数自体が類本によつて一定していない事は梅尾翔雲著『理趣經の研究』<sup>(6)</sup>で示され、広く知られている。それによれば、「真言宗の常用經典たる不空訳の『理趣經』では、この清淨句が十七になつて居るけれども、類本によりてその句の数を異にし、玄奘訳の『理趣分』は六十九、菩提流志訳は十五、金剛智訳は十三、法賢訳は十六、施護訳と蔵訳『金剛場經』では二十、蔵訳『百五十偈の般若理趣』は十八若しくは二十四となつて居る。此が十七清淨句となつて居るのは西蔵語訳の『理趣広経』と不空訳の『理趣經』とに過ぎないのである。」と云う。

梅尾の『理趣經の研究』で示されている類本による清淨句の異同についての表によれば、「色」「声」「香」「味」として居るのは、十七の清淨句をあげる不空訳の『理趣經』と西蔵語訳の『理趣広経』に限られている。その他の類本では、「触」が加わっている。

梅尾は、この部分に言及し、十七の清浄句を挙げる不空訳の『理趣経』および西蔵語訳の『理趣広経』と、十八の清浄句を挙げる蔵訳『百五十偈の般若理趣』とを比較している。十七清浄句と十八清浄句との差異である「触」の有無については、『百五十偈の般若理趣』では、その清浄句の第三と第十八とに、この觸清浄句があり、全く重複した外觀を呈して居る。併し第三句の觸は男女の接觸を意味する計里枳羅を訳したもので、第十八句のそれは五塵の中の觸を意味する梵語の薩波羅紗を訳したものであるが故に全く同語異義である」としている。これは、『十七聖曼荼羅義述』にも現れる内容である。同様の指摘は、神林隆浄著『大日経、理趣経講義』にもみられ、第十八の「触」がないことについて、「其所に触は当然現れて来べきはずである」が、「十七の数に捕われて居て」、「漢字としては、触の字が二回出ることとなるから」としている。

ところで、十七清浄句をもつ理趣経が、密教經典として実修法へと展開していくことに関連し、梅尾の『理趣経の研究』は、『理趣広経』とその略出とされる『百五十偈の般若理趣』との比較から、『理趣経』の成立した当時に、清浄句と曼荼羅十七尊との間に必然的関係のなかりしこと<sup>8</sup>を明らかにしたと主張している。つまり、十七という清浄句の数は、積極的につくられたものではなく、たまたま十七であつたものが、十七尊との関連で用いられるようになったとしている。

しかし、この点について、神林の『大日経、理趣経講義』では、「十七清浄句の十七の数に捕われて居る」とか、「漢訳の十七清浄句は、漢字を基本的に考え、而も其れを強いて十七字に限定しようとする考えが見えて居る」としている。これは、福田亮成著『理趣経の研究 その成立と展開』<sup>8</sup>において再検討されることになつた重要なテーマであり、十七への整理が積極的な意図をもって行われたと考えるべき根拠は豊富に示されていると思われる。

いずれにせよ、初期の「理趣經」には、五塵の「触」を除くという発想はなかったにもかかわらず、十七清淨句では、「触」を除く「色」「声」「香」「味」の四清淨句が挙げられることになった。その過程については、「触」の重複および「十七」という数への限定という神林が設定した枠組みの説明で差し支えないと思われる。しかし、重複についても数の限定についても、内容に踏み込んだ検討であるとは思えない。

福田の『理趣經の研究 その成立と展開』では、「四諦・八聖道・十二因縁を始めとして、三十七道品・三十二相・八十随好等の、『阿含經』以来述べられてきた一切法を数える清淨句から十七清淨句への捨象の過程は、清淨句が一句ずつ完結するものであると同時に、全体である意味を表そうとしていった、その明瞭化の過程とも考えられる」としている。その「ある意味」とは、「煩惱の清淨なり」という基本的な主張「である。では、「触」を除くという最後の段階を経て、何がより明瞭になったのであるうか。

「触」および「身」と、「色」「声」「香」「味」

六塵から「法」を切り離して、「色」「声」「香」「味」「触」の五塵として扱うのは、五根、五境として「意」や「法」を分離する扱いから了解することができる。理趣經においても、その成り立ちにおいては、その立場を踏襲していると考えることができる。そこから、「触」を除く四塵を抽出するという態度には、数合わせのためや重複を避けるという意義に加え、儀軌との融合による密教經典化の重要な発展をみることができる。しかし、このことよって、「色」「声」「香」「味」と「触」の間には、何らかの一線が引かれることになる。

もともと五塵あるいは、五根、五境から、一つを除き、四つを抽出することは、この十七清淨句の成立のみに見られるものではない。また、除かれるのが「触」のみとは限らない。たとえば、俱舍論にみられる「八事俱生

随一不滅」では、「色」「声」「香」「味」「触」から、「声」を除き、「色」「香」「味」「触」を挙げる。その根拠は、所造色の中、声は物体中発するときもあり、発しないときもあるからとされている。したがって、十七清浄句で、「触」を除いて「四塵」を定めた意義は自明ではない。

「触境」あるいは、それをとる「身根」を、「眼」「耳」「鼻」「舌」から区別する議論は俱舍論にもあらわれている。「前の四の境は、唯、所造」であり、「身の境は不定なり。或は、(能造の)大種を取り、或は(所)造色を取り、或は二を俱に取る」とするものである。また、「前四」は、「身」に流至するとし、「身」を「眼」「耳」「鼻」「舌」とは異なるものとして扱っている。

十七清浄句では、「色」「声」「香」「味」のみが扱われるということ、明示とはいえないが、「触」ないし「身」が、前四に対する特別な存在として浮き彫りになってくる。それは、「身」には「前四」からの流至があるという点であったり、また、「触境」にある身根の所触に冷飢渴が挙げられている点である。さらに、これに加え、「煩惱の清浄なり」という基本的な主張「の何かについての明瞭化もすすめられていると考えることができる。四塵としたこと自体は、唐突なものではないが、この変化によって重要なステップが踏まれたように思われる。

### 「色」「声」「香」「味」と身体

「色」「声」「香」「味」「触」は、大概、この順序に並べられる。また、「眼」「耳」「鼻」「舌」「身」についても、この順序となる。六根の順序については、俱舍論には眼等の五根は現在の境のみをとり、意はそれが不定であるから、まず五根を説くという説明が見られる。さらに、五根のうち、「眼」「耳」「鼻」「舌」は所造のみをとり、「身」は不定であるから、前四根を説くという。これに続いて前四根の順序を説明している。この順序は、

対象の遠近および速さという基準、または、身体の中での上下という基準によって並べられているとしている。遠近および速さという基準については、「眼」と「耳」、「鼻」と「舌」とをそれぞれ対応させて比較している。眼で感じる光は、耳で感じる音より、遠くから速く到達する。香や味については、光や音よりも遥かに近い距離であるが、鼻がまず香を感じ、舌が味を感じるのはその後だとしている。このため、「色」「声」「香」「味」の順になっているという。

この説明以外にも、この順序には、これらの境の性質が反映している。「根」への対応は曖昧になってしまいが、身体に及ぼす不随意の反応は、「色」「声」「香」「味」の順に強くなる。「色」と「声」は物理的な波で、「色」は光という電磁波であり、「声」は音という大気の振動である。これに対し、「香」と「味」は化学的な物質で、「香」は大気中の物質であり、「味」は溶液中の物質である。「味」は、口から摂取された物質であると考えれば、「味」は単に舌によって感じられる反応のみではなく、食べ物や薬などによる反応を引き起こす。「香」も、大気中をただよう物質が、吸入薬やフェロモン活性のような身体への反応を引き起こす。この二つの物質によって、いずれも不随意あるいは無意識の反応が引き起こされる。一方、「声」は、意識に関わる中枢神経の賦活に関与するが、「色」は、身体への大きな反応を引き起こすものではない。

この身体への反応は、対応する「眼」「耳」「鼻」「舌」という「根」を介して起きている反応とはいえない。また、それをひきおこすために意図のようなものは必要なく、一旦暴露してしまえば逃れようがない。さらに、この反応は、「身」という「根」に対応した「触」という「境」で起きているともいえない。生存に関わる反応の場としての身体は、「触」に対応する「根」としての「身」とは別の立場を与える必要があるように思われる。



## 五根、五境と言語

そもそも、「根」は、身体はどこかで起きている影響や反応の全てを検出しているわけではない。また、五境以外にも生命に必然の要素があるのかもしれないが、「根」が備わっていない要素は知る事さえできず、生命体の生存に関わる要素のいくつかを特殊感覚として知覚しているにすぎない。

その一方で、特殊感覚には、言語という特別なはたらきを積極的に見出ししてきた。これには、「色」と「声」が強く関わっている。「声」の中から、了解可能な言語としての音が抽出されて、言葉になるが、それは、音波が直接及ぼす身体への作用とは別の意味を持つ。同様に文字や記号は、「色」から抽出されている。

言語は、「色」や「声」から意図をもって意味を取り出す必要がある。その意図をもって意味を取り出す作業が精密に分析されて、「意」や「心王」、「心所」が研究されて来たものではなからうか。また、言語は、「現在」という制約を越え、過去へも未来へもおよぶ。もともと、五境も五根も、「現在」の境をとるという共通性をもっている。しかし、言語、特に文字によって表される情報や意味は、時間の束縛を越え、これが、時間について不定である「意」をはじめ、「心」に働きかけている。あるいは、「心」の働きの表れとして文字や記号として表されている。

## 四清浄句の順序と身体

「色」「声」「香」「味」の順序には、身体への反応についての順序であるという側面と、言語への関与の順序であるという二つの側面が指摘できる。身体への反応は、「色」から「味」へと強くなり、言語的関与は、「色」

から「味」へと弱くなる。

この「色」「声」「香」「味」の順序は、「招」「引」「縛」「喜」の四摂に配されることによく対応している。欲望の元となる意図を「心」に生成させるスタート段階から、実際に欲望が満足され身体で体感する段階へと進んでいくことへの対応である。言語的影響については、意味あるものを取り出すための積極的な感知が必要であり、気付かないことに気付く所からはじまっている。それが、欲望の起原となる。一方、身体的影響については、積極的に遠ざけない限り、その影響をうけ、逃れることができない。これは、気付かぬうちに大きく影響され、しばしば、依存を形成するほど強烈となる。そうした点に、四摂と四清浄句はうまく対応しているように思われる。ところで、言語に比べ、身体への反応は、明示されたものではなく、それを知るのは容易なことではない。「色」「声」「香」「味」に必ず備わる性質であるにもかかわらず、「根」への対応がないからである。時に、「身根」の対象になるような反応があれば、それを認識する事はできる。これが「流至」といわれる部分であるのかも知れない。それだけでも「身」を特別視する意義であるが、それは「触」に含めればよいことである。むしろ、「身」に起こってくる現象の大方は感知できないものであり、しかも、「根」が用意されていない未知なるものも存在しているという点こそが、特別視されるべき点ではなからうか。

もし、「身」の境である「触」を「色」「声」「香」「味」と同列に記載してしまつては、「触」に対応する「身」ばかりが明らかにされてしまつていたように思われる。このため、「身」がもつ反応の場として側面が消えてしまいかねない。

その消えてしまいかねない側面を言語的に明らかにしていくのは困難である。なぜなら、「身」に起こってくる現象を言語で表すことは、二つの意味で難しいからである。一つは、身体的な反応自体に、非言語的な傾向が

あるという点である。表現が難しく、分析が難しく、身体に起こっていることを理解する事の困難さに直面する。そして、もう一つは、そのことを言語的に積極的に表現すれば、誤った身体に関する見方を示す事になるという点である。個々の現象を列挙したところで、決して網羅されることはない。つまり、積極的な方法では表現しにくくことはできない。しかし、この困難は、五境から「触」を削ることで、明示はされてはいないが、克服されているように思われる。

この四清浄句は、四塵をしめして六塵を代表しているものであるという。同時に、他の清浄句と同じく、欲望の生成からその満足までを端的に語っている。ここで、表現されているのは、欲望は、言語をはじめとする意味にはじまるが、現実化すると言語を離れた一旦曝されると避けられないような身体への影響に極まるものであるということである。この四清浄句は、「触」も「法」も挙げていないが、それによって、意に現れる欲望の原点の清浄だけでなく、欲望の終着点である身体の反応のすべての清浄をも暗示しているように思われる。これは、五色や五境をたてて発展した仏教の認識論が、肉体としての身体を離れてはいないということであることを暗示しているように思われる。そして、身口意三平等の句門を明らかにしているように思われる。

### おわりに 四清浄句の解釈

十七清浄句の中でも、「色」「声」「香」「味」の四清浄句は、經典成立についての議論の題材にはなってきたが、その内容についての議論は盛んではないように思われる。また、この四清浄句への見解には幅があり、解釈が分かれている。様々な現代語訳が入手可能であるが、外界にある知覚の対象としての「色」「声」「香」「味」とい

う解釈で訳されているものが最も多い。次に多いのが、『理趣釈』や『真実經文句』の解釈に則つたもので、配当された菩薩の三摩地を記したものである。<sup>(11)</sup> また、自らの中に「色」「声」「香」「味」の出現を見出すという立場のものがある。<sup>(12)</sup> これには、儀軌的な解釈や、アナンダガルバの解釈に則つた解釈や、チユニヤーナミトラの解釈の影響があるものと考えられた。

十七清淨句をとる理趣經でなければ、外界の知覚の対象としての解釈がふさわしいように思われ、この解釈が最も多いのは当然といえる。しかし、十七に整理されたものではなく、それを意識した解釈が望ましいように思われる。この点に関し、配当された菩薩の三摩地を解説するというのは、妥当な解決法のように思われる。また、その発展の一つとして、自らの中に「色」「声」「香」「味」の出現を見出した立場の訳も肯定されるように思われる。

いずれが、もつとも好ましい訳であるのか判断はできないが、配当された四菩薩の三摩地への配当を意識した立場が、儀軌化という視点を最も反映するものではないかと思う。おそらく、それが四塵をあげたこの一節への積極的な解釈ではないかと思う。しかし、わざわざ明らかにするまでもないことでもあり、表現することも困難であろうとは思つが、なぜ「触」を除いているかという点は、この十七清淨句を考える上でヒントを与えてくれるように思われる。

### まとめ

十七清淨句の理趣經は、不空訳『理趣經』と西蔵語訳の『理趣広經』に限られている。十七清淨句の理趣經では、「色」「声」「香」「味」であるが、他の類本には、ここに「触」が加わる。そこで、「触」が除かれた意義の

内容的検討を試みた。「触」が除かれることで、五根としての「身」ではなく、身体的な反応の場である肉体としての身体が存在が暗示されているように思われた。また、「色」「声」「香」「味」の順序は、身体的な反応の強さの順序であると同時に、言語的な影響の弱まる順序でもある。欲望は、言語的な方法で気付かれるが、それが実現する過程で肉体的な要素が強まり、身体的な満足で極まっていく。そのような「身」を読み取ることができないのではないかと考えた。

註

- (1) 智山伝法院総合研究「身体と欲望」の一環として行われた理趣経の講読会での議論をもとに、個人論文として発展させたものである。なお、講読会では、那須政隆著『理趣経達意』をもとに、理趣経の講読を行った。本稿でも、『理趣経達意』を出発点として検討することとした。
  - (2) 那須政隆『理趣経達意』昭和39年 p64 文政堂
  - (3) 那須政隆『理趣経達意』昭和39年 p60 文政堂
  - (4) 那須政隆『理趣経達意』昭和39年 「はしがき」p2 文政堂
  - (5) 那須政隆『理趣経達意』昭和39年 pp61-64 文政堂
  - (6) 梅尾翔雲著『理趣経の研究』昭和5年 pp103-140 臨川書店
  - (7) 神林隆浄著『大日教、理趣経講義』昭和8年(昭和51年復刻) pp343-365 名著出版
  - (8) 福田亮成『理趣経の研究 その成立と展開』昭和63年 国書刊行会
  - (9) 福田亮成『理趣経の研究 その成立と展開』p328 昭和63年 国書刊行会
  - (10) 金岡秀友、中村元、八田幸雄、福田亮成、松永有慶などの多数の訳がある
  - (11) 上田霊城『理趣経講録』平成14年 pp89-93 隆昌堂
  - (12) 宮坂宥勝・福田亮成・仏典講座16 理趣経』平成2年 pp86-89 大蔵出版 など
- キーワード 理趣経、十七清浄句、四塵、触、身